

## 高校教師のライフヒストリー研究 (3)

——戦後民主主義一期生の女性教師の事例——

塚 田 守

Life History Studies (3)

—A Life History of a Female Teacher of the First Generation  
of the Post-World War II Democracy Era—

Mamoru TSUKADA

### はじめに

この小論は、1人の女性高校教師のライフヒストリーを描写し、以前に行なった男性高校教師のライフヒストリー研究<sup>1)</sup>と比較しながら、高校教師におけるジェンダーの問題を論じるものである。ここで分析の対象になっている女性教師は、50歳代半ばの多くの「戦後の平等教育一期生」として、「女の時代」を生きた1人にすぎず、その世代全体を代表しているわけではないであろうが、その世代の特徴の多くを共有していると考えられる<sup>2)</sup>。

山崎（1995年）は、女性教師のライフコース研究の蓄積がまだ不十分であるとしながらも、先行研究を整理している。まず、女性教師は男性教師と比較して、職場と家庭の両方に共稼ぎの負担が多い。また、女性教師の職場生活のあり方は結婚や出産等の家庭関連事項を抜きにして考えられない。さらに、「家事・育児」と「余暇・自由時間」の時間量でも女性教師と男性教師には明らかな差が見られ、女性教師には「家事・育児」の時間が多く、「余暇・自由時間」の時間が少ない。そこで、山崎はこのような先行研究の整理に基づき、1人の女性教師のライフコースを事例研究的モノグラフとして分析し、「個人時間」「社会時間」「歴史時間」の3つの枠組で、戦後の教育史のなかを生きた1912年生まれの女性教師のライフコースを描写、分析し、教師としての「力量形成」について論じている。このモノグラフで、山崎は「個人時間」「社会時間」「歴史時間」のダイナミックな相互作用の結果としての女性教師のライフコースを本人の生き生きとした言葉を引きながら描写し論じている。山崎の研究は、堀内（1999年）が言うように、必ずしも女性たちの生の語りから、ジェンダーによって秩序立てられた差別化された社会への問題提起を行なおうとする「フェミニズム的アプローチ」ではないかもしれないが、モノグラフの描写のなかに、さまざまなジェンダーに関わる問題が言及されている。その1つは、終戦直後、産休、育児休暇がない歴史的現実を含む学校システムの問題点があった。第2に、「良妻賢母教育」を意識の上では否定しながら、現実の家庭生活において、「良妻賢母」を期待され、演じ、戦後

の民主教育の理想と現実のギャップで生きなければならなかった女性教師の現実の問題があった。

木村（1994年）は、お茶の水大学の1962年卒業の16人との再会を『30年目の同窓会』と称し、卒業後の同級生を訪ね、「女の時代」を生きた聞き取りをエッセイとしてまとめている。その16名のうち、7名が一貫就労者であり、そのうち1人を除いて公立校の教員であった。そして、彼女たち既婚女性の自立の要件は、「不十分でも保育所があることを前提とすれば基本的には『本人の意志』と『夫の理解』と『労働条件』の3点……」（259頁）であった。そして、1960年代初期は、主婦が女性の生き方の正統であり、働く女性はなぜ働くのかと問われた時代であった。また、その頃、全国の大学文学部の女子学生の割合が37%になり、世にいう「女子学生亡国論」が盛んに議論された時代でもあった。

分析対象であるインタビュー時点で55歳の田中さん（仮名）もまた、「女子学生亡国論」を学生時代に聞き、反感を持った。インタビューした年の1月に同級会があり、働きつづけた女性たちの間で、それが話題になった。

同世代の女性の先生、かなり似ていますね、考え方生き方が。この1月3日でしたか、同級会をやったんですよ。A大学の国文科の。……そこでみんな同じような話が出ました。私たちの年というのはある意味で、パイオニアみたいところがありまして、私たちが大学に入った頃でしたか、「女子大生亡国論」というのがありまして、大学に女性が多くなると結婚して辞めちゃうから、国費の無駄使いになるわけで、国を滅ぼすことになるなんて盛んに言われていた時なんですよ。「ねえ、ひどいよね。ひどいよね」って言い合った仲間ですの、11人中1人だけが教員にならなかっただけで、今でも7人が仕事を続けています。……やっぱり、わたしたちの年代っていうのは、多少肩肘張るところもあるんだけど、「頑張ろう世代」だったと思うんです。

女性として、「パイオニア」的役割を担い、「頑張ろう世代」として生きた田中さんのライフヒストリーにはどのような「ジェンダーの問題」があるのであろうか。

### 教師になるまで：経済的自立をめざして

田中さんは5人兄弟の3番目の長女として農家に生まれた。小学校5年生の時に父親を亡くし経済的に不安を感じ、「女も職業を持たないといけない」という思いがその頃に芽生えた。また、母親は女学校を出て教師になるつもりでいたが、農家を継ぐために養女となっており、「農家を継ぐと小さい時からきまっていた……」ので、「小さい時に、先生になりたかったけれど、ならなかった。」と田中さんによく話していた。田中さんにとって、経済的自立のために職を持つことは絶対的なものであり、教師を選んだのは、このような母親の期待があったのかもしれない。

しかし、母子家庭の田中さんにとっては、高校生活にかかる費用を考えると進学は不可能のようであった。そこで、中学校を卒業したら働くつもりで、トヨタ関連の働きながら学べる学校に通う予定で面接試験も受けた。しかし、その頃、日本育英会の特別奨学金制度ができ、高校への進学の道が田中さんに開けた。当時のお金で3,000円で、高校の授業料、交通費など必要経費はすべて奨学金で支払うことができた。

田中さんが進学したのはその地域の名門K高校であった。K高校では卒業生のほぼ全員が大学に進学した。田中さんも大学進学を当然のことと考えた。大学へは予約奨学生に申し込みさえすれば、合格したら貸し付けられるというものがあった。そして、田中さんは農業を手伝うために通える学校ということで、地元の国立大学に進学した。最初は通学していたが、遠いので大学寮に入った。

寮は学生左翼グループによってさまざまな形で支配されていて、田中さんも他の寮生とともに集会やデモに参加していたが、論じられているイデオロギーには疑問を感じていた。農家に生まれ育った田中さんの経験からすると、左翼学生が主張していることは、現実の社会を理解していない労働経験もない「坊っちゃんのお遊び」のように思えた。田中さんはまた、女性部員の少ないワンダーフォーゲル部に入って、男性部員と一緒に活動し、男女の平等な関係を自然なものと感じながら、卒業まで部活動を続けた。

大学では国文学を専攻した。国文学科の卒業生のうち1人を除いて他全員が教師になったほど、教職に就くことはごく自然なことであった。また、働く母親の影響で、女性が職に就くことは当然のことという考えが、田中さんにはいつもあった。さらに、愛知県では、1960年代後期は新しく高校が増設された時期であり、高校の教師の需要が大きく教職は現在ほど難しくなかった。当たり前のように全員が合格した。田中さんたちが同世代の男性と違っていたのは、「デモ・シカ教師」として教職についたのではなく、働く女性の「パイオニア」として、限られた選択肢から教師という職を自ら選んだのであった。

### 独身時代：平等な雰囲気になかで

地域では名門のH高校に新任教師として勤務した。新卒採用者が12名おり、男性教師はそのうち3名、女性が9名であった。若い教師は、男性も女性も担任を持たせてもらえなかった。校務として図書係などを務め、教師の間で男女差別は感じたことはなかった。図書館の館長が田中さんの高校時代の元担任先生だったので、さまざまな面で助けてくれたからかもしれないと田中さんは言う。ただし、生徒たちの反応では、「女である」ことを意識せざるを得ないこともあった。同じ国語科の新任の男性教師と2年目の田中さんが一緒にいた時、ある生徒は経験の少ない男性の新任教師に学校の行事に関することを質問した。田中さんが2年目だと知っていて、なぜその新卒の来たばかりの先生に質問したのかをその生徒に聞いてみると、「男の先生だもん」という返事が返ってきた。ちょっとしたエピソードにすぎないが、日常レベルにおいて、生徒たちの女性教師を見る目は男性教師を見る目より厳しかった。

独身時代の田中さんにとって、このような生徒のちょっとした女性軽視のまなざし以外は、日常的に女性差別を意識することなくのびのびと過ごしたが、結婚し子どもを産んだ時はじめて、女性であることを意識させられたのであった。

### 出産と教職現場：体力勝負の日々のなかで

田中さんは、同じ境遇で育った<sup>3)</sup>8歳年上の高校教師と27歳の時に結婚した。結婚してはじめて、男性と女性の差を実感することになった。農家の長男の嫁になった田中さんは、

家事の一切をすることを期待されていた。教師として働いている田中さんに対して、姑は農家の嫁としての役割を求め、子どもが小学校までは朝食を作ってくれたが、「晩ご飯はやってくれるかね」と言われ、同居している義弟、義妹を含め大家族の夕食作りは田中さんの仕事になった。

結婚後、年子で3人の子どもを産んだ。教師としての出産とはどのようなものであったか、すこし長いが田中さんの話に耳を傾けてみたい。

当事者でないちょっと想像できない感じ。とにかく体力が勝負だと思いました。3月に結婚したんですね。で、4月に転勤して、5月ぐらいからつわりが始まったんです。それでもまだ軽い方だったので、それはよかったんですけど、家に帰ると「ぐたー」としちゃって、食事の仕度もできないんですけど、とにかく食事の仕度をして。主人はその頃B高校（名古屋市内）にいたもんですから、帰りが遅かったんですね。それから、主人の母親はとにかくたくさんの田畑があって、暗くなるまで畑仕事をしてるんですね。そして、隣近所にも嫁がお勝手（台所の仕事）やるのは当たり前っていう地域でしたから、「とにかく何かを作って」というふうできましたので。だから今思うと教材研究がいいかげんで、生徒に「申し訳なかったなあ」って思うんですけど。それで、12月、まだ転勤したばかりなのにね、12月のほぼ冬休みぐらいから出産休暇を取って、期末試験が上旬にありますからね、採点して成績を出して、それから出産休暇を取って、1月19日に生まれたんです。それで、2月の終わりぐらいに確か出産休暇が切れたと思うんですけど。産前産後4週でしたかねえ。6週でしたかねえ。ちょっと記憶がないんですけども、何しろ2月の終わりぐらいか3月ぐらいからまた学校に行ったんですが。

……確か育児時間がありましたね。1時間だったかなあ。毎日1時間遅く行ったような気がするんですよ。8時半始まりだけど、9時半までに行ったような気がするんです。……朝は1時間遅く出て行きまして、ずっとそうしてたら、そしたら夏休みの頃に第2子妊娠がありました。でも、そのままずっと行きまして。第2子の時はほとんどつわりも何にもなくて。夏休みが終わってから妊娠がわかったぐらいだったかなあ。それで、とにかく第2子の時は普通にずっと来まして、むしろ第1子の育児時間でずっと朝もゆっくり出てまして。でも、1年経つと育児時間は切れちゃいますので、それからまた普通勤務になりまして。

たまたま、うまい具合に第2子の予定日が4月12日で、ちょうど予定日に生まれたんですが。やっぱり、3月の期末試験まで全部授業やって、採点も全部やって、成績も全部出して、あとの所のちょっとのところは代わりの先生がいらしゃったのか、学校の先生が埋めてくださったのか、かなり前なので記憶が定かじゃありませんけど。それで3月が終わりから、今度はちょっと計画的にできるだけ前の方を、自分が丈夫だってことわかったもんですから、それに私の母親も安産タイプでしたので、出産前を減らしまして、後ろにもっていったんです。出産休暇を。それで4月の12日に生まれましたけども、5月、6月のかなり後ろの方まで出産休暇を後ろに伸ばしたんですよ。それで6月の終わりというと期末試験の頃ですので、ちょうどそこで交代して。もう出産休暇だけ、育児休暇ありませんでしたので、2人目も。……第2子の育児時間が切れる前に、切れてからかなあ。とにかく、3人目ができてですね。その時3人目ができた時、これはもう私本当に忘れないんですけど、とにかく年子で2人、また生まれてまた年子になってしまうんだあって。

姑は農作業で遅くまで働き、夫は遠い学校に勤務していた。妊娠をしたことも特別なこととされず、家事一切を任されていた田中さんであった。「体力が勝負だ」と思いながら、子どもが産まれる毎に産休を取り、育児時間を利用して3人の子どもを育てようとしてい

た。「国語は教材研究を十分しないとよい授業ができない」というのが持論の田中さんであるので、出産時期は教材研究ができなくて罪の意識はあったものの、農家の大家族のなかの嫁としての役割を果たす「体力勝負の忙しい日々」が続いた。

3人目が生まれた時に田中さんは校長室に呼び出され、校長から教職を辞めるよう勧められた。

3人目の時に校長室に呼ばれて、その校長先生はK高校（田中さんの母校）で、化学の授業を受けた人でしたので、校長と教員の関係以外に、昔の先生と生徒の関係もあったものですから、無遠慮に「お前、もう、教員辞めろ」って言われてましてね。「そんな3人も産んで教員なんかできるわけない。お前の旦那はよっぽど甲斐性のない奴だなあ、女房に子ども3人も産ませておいて、先生をやらせんと、生活できんのか……3人も産んで教員ができるんか……」と言われました。……家に帰って主人に相談して、「校長先生にそう言われちゃったし、どうしよう」って。……「じゃあ、お前は教員辞めればいいじゃないか」って主人が言ったんですよ。……いつも冗談で、「教員と主婦が両立できなかつたら、主婦やめるからね」って主人にも言っていたんです。学校でも他の先生に公言していたんですよ。「両立しなかつたら、主婦やめる」って。でも夫は「両立できなかつたら教員やめたら……」と言ったんです。

仕事をしていて結婚しても辞めない女性でも、子どもが産まれた場合、特に田中さんのように、3人の子どもの生まれた場合、一般的にはその仕事を続けることは不可能である。それでも田中さんが教職を辞めなかったのは、「絶対教員は辞めない」という強い決意と母子家庭に育ち、経済的自立の重要性を痛切に感じた経験があったからであろう。このような校長の発言は、当事の組合運動の視点からすれば、女性差別だと批判されるべきであった。しかし、田中さんは組合の考え方とは違った感覚であった。

十分に働けないのに、その給料を同じようにくれとか、出産したら、その時は働けないわけだから、仕事をしないわけだから、それなのに、金くれとか、休暇くれとか言っているのかなという感覚が強かったものですから、管理職の立場に立てば、こんな発言になるのかなと……。

教職現場において、男性教師に子どもが生まれる場合には、祝辞がストレートに言われるが、女性教師が出産するということは、必ずしも歓迎されない雰囲気があるようだ。このように、教職現場においても、女性教師の出産は仕事の障害になるという認識があり、仕事を持つ女性の出産する権利、母性を保護する視点は、当時はまだあまり尊重されていなかった。また、田中さんは教師として学校現場の実情を知るからこそ、強くその権利を要求できなかったが、田中さんは3人目を出産し、育児をしながら教職を続けることを選んだ。

### 家事・育児と教職：嫁、妻、そして、母として生きて

職場と家庭の両立を考え、勤務時間内は学校の仕事に専念し、勤務時間が終われば帰宅し、家の仕事をしたいと考えていた。そして、一日を学校8時間、家庭8時間、休息・睡眠8時間と3つに分け、役割を切り替えていた。

夫の家族との同居であるが、姑は家事に関しても補助的な役割を果たしていたにすぎず、田中さんは嫁、妻、そして母親の3つの役割をこなすことが期待されていた。

3人目が生まれた時に、いくらなんでも、お姑さんに3人みてもらうわけにもいかないのに、上の2人を保育園に預けました。朝連れていって、延長保育で6時まで預かってくれましたので、2人（上3歳、真ん中1歳）を迎えにいったスーパーに寄って、家に帰る……通勤の途中にあった保育園です。夕食は8時くらい。子供達には帰りの車のなかで、お店で買った夕食代わりにするようものを食べさせて、8時頃に食事の用意ができたころは、子どもはおなかいっぱいになっちゃっているというか。……

このような忙しい嫁、母である妻に対して、同じ教員であった夫はなにも手助けをしなかった。当時の夫に対して田中さんは言う。

まったく家事はやらない人です。主人がやろうとすると、義母さんがでてくるのですよ。朝食の支度は義母さん、私がいる時は、私がやりますけれど、学校に出ている時は、朝ご飯は義母さん。旦那さんがやりたくてもできないし、やらなくてもすんでいく。これはねえ。嫁と姑の問題などいろいろありますし、とにかく、田舎ですので、考え方が古いんですよ。私自身も含めて。

夫は農家の長男であることで、家事、育児に参加することはなかった。その夫に対して、勿論、不満を感じるものがあつたけれど、夫は何もせず遊んでいるわけでないのに、家事と育児に参加しない夫を容認していく態度をとっていた。

学校の仕事も本当にまじめにやる人なんですよ。それで全部しよいこんできてね。家で徹夜ぐらいに仕事しているんですよ。「もうちょっと他の先生に頼んだら」って言うんですけどね。しかし、例えば「総務の係の人でも担任もっている人には頼めんし、女の先生はまた家では仕事があるし」ってね、そういつて全部自分でしよってきて。もちろん学校でもフルにやっていますけども。……遊んでやらないんだとちょっと腹もたちますけど、そうじゃないもんだから「しょうがないかなあ」っていう気にもなるんですよ。だから、学校の仕事いっぱいもってくるとかね。それから畑の仕事してるとかね、農作業はよくやる人です。やっぱり農家の長男ですから、それからね、やたら本を買ってきて、本をいっぱい読むんですよ。……「勉強なんかしてないで、学校の仕事なんかしてないで、それは適当にして、家ではもっと子どもと遊んでくれないかなあ」って思ったりしたんです。

第1に学校の仕事、次に畑仕事、そして、時々子どもと遊ぶ、これが夫の生き方で「しょうがない」と受け入れていた田中さんであった。

田中さんはまた、夫のことを日常生活を気に留めず誠実で品性を重んじる「化石のような人」と称し、尊敬の念すら感じているようである。

昼ご飯なんかも作ってなくて、私がいないうちに、だいたいお義母さんがやったりするんですけど、……「なければ、食べなくてもいい」って言うんですかね、おかずがなければ、おかずは食べなくてもいい。だから、おかずがまずいとか少ないとかそういうことは、いっさい言いませんし、部屋が汚いとかいっさい言いませんね。「時々はちょっとはおまえ勉強しろよ」とは言

いますけど。私があんまり本を読まなかったり、あんまり疲れてぼーっとテレビを見てると、「テレビを見とる時間があったら、本でも読んだらどうだ」って時々言いますけど。家事をやりはしないけど、文句は絶対言わないですね。……たとえて言うと、化石のような人だと思うんですよ。なんか変な、変なっていうかあの人なりのっていうか、ある意味すごく立派だと思うんですけど、立派過ぎちゃうんですけど、聖人君子の道徳観みたいなのがあって、そういうふうに生きようと思ってるんじゃないですかね。時々「人間が一番大事なのは品性だ」って言うんですよ。だから、誰に対しても裏表がないですし、仕事を誠実に取り組みますし。

家事、育児に参加するわけではないが、食事の内容、整理整頓などに関して文句は全く言わず、人間の品性を重んじ、仕事に誠実に取り組んでいる夫をみてみると、嫁、母親、妻として1人で家事をこなすことも、「しょうがない」こととして、受け入れざるを得ない田中さんであった。

### 担任を持つ教師として、母親として

担任を持たず、教材研究と授業が主で、校務としては比較的負担の少ない図書館、総務などの仕事をやっていた。しかし、子育て中の田中さんもやがて3年生の担任を持たなければならなくなった。校長の「担任ができんような先生はもういらんで……」の一言に、田中さんは「じゃあ、やります」と答えた。田中さん、35歳の時であった。しかし、女性教師が担任を持つということに対しては、父母のまなざしは厳しかった。

例えば、入学式の時にですね、親の前で「1組誰々先生、2組誰々先生、3組誰々先生」って担任を発表します。そうすると、父兄の顔つきがわかるんですよ。「なんだ、女か」って。そういう顔されるんですね。本当にそれはわかるんですよ。私自身も、たとえば子どもがね、女の先生で産休で代わりの先生っていうことがあったりしたんですよ。やっぱり、母親として女としてのそれは当たり前のことだと思うんですけど、だけど親の側としてはちょっと不安になったりとか、教室の雰囲気が変わったりしてるなっていうことが子ども見ててわかるもんですからね。「女の先生か」っていう反応、自分自身もわかるもんですから、「親はそういうこと思うのは当たり前だ」と思ったんです。「仕方がないことだ」と思ったんです。

田中さん自身も母親として、子どもの担任が女性であった場合には、産休などがあり子どもが不安定になったことなどを経験し、十分理解はできた。しかし、「女の先生か」という女性軽視のまなざしは、担任を持って初めて強く感じるものであった。

担任を持ってそのようなまなざしを感じながら、「男性教師には負けない」という気持ちは常にあったと言う。

例えば生徒と、個人面接という言い方をしますけども、いろんなことを、学校に慣れたかとか、勉強できてるかって話し合う時間がありますね。男の先生が20分ごとに切り替えるっていうと、私は30分ごとにやってくとか。それから男の先生が職員室で他の人がいる中でおやりになると、私は作法室で1人だけで、生徒にも「足投げ出していいよ」って言って、リラックスさせてやるとか。生徒に「この先生だから話せる」という状況を作ってあげるんです。そういうふうで、「他の人（男性教師）が100やれば私は120やるんだ」という意識でやりました

けども。H高校の時もそうでしたし、K高校へ行った時もそうでしたけども、どちらも女の先生は担任しない、女には担任させないっていう空気の学校だったので、しっかりやらなきゃという気持ちが強かったですね。

それぞれの学校で唯一の女性担任として、女性であることへの甘えは許されないと考え、個人面談や家庭訪問では男性教師以上のこと、男性の120%の仕事をする気構えであった。

学校内の校務に関しては、時間内に終えることはできた。しかし、担任を持つことに伴う家庭訪問は育児をしていた田中さんには、問題になることがあった。

夏休み、家庭訪問にみんな行くんですね。保育園が休みになっちゃうことがあるんですよ。そうすると、子どもを家庭訪問に連れて行って相手の家まで行ったら失礼だから、近くの川原で遊ばせておいて、それで私だけ行くと親御さんがすごく歓迎してくださって、ビデオを見せてくださったりね。「子どもがKフィル（地域の有名なオーケストラグループ）に……これ先生見てください」って。20分ぐらいで帰ってくるつもりが1時間ぐらいになっちゃって。子どもは（については）黙って（いて）、連れてきましたなんて言わないもんですから、こう、いらする感じですよ。

それから、そうじゃない街中ですと、車の中に絵本を数冊置いておいて、「お母さんちょっと行ってくるから待っててね」って、20分か30分のつもりで1時間ぐらいになっちゃったりして、ずっと後になってから思い出してはね、「あの時はかわいそうなことしたなあ」って。……「よくまあ、あれだけむちゃしとったなあ」と思いますけど。川原なんか流されたりしたらおしまいですもんね。そんなにむちゃくちゃ深いところじゃないですけど、1メートルぐらいの深さのところがあったと思いますけど、そういう川原で遊ばせといて、近くの家に行ったりとか。訪問先には「女の先生、子ども連れてるよ」って絶対思われちゃいけないから、本当にそういうことは出さないで、黙って。でも「子どもはやっぱ、側にいてやる時は置いておきたい」っていう気持ちもあって、「帰りにどこそこへ行こうね」っていう約束をしたりして、連れて行っただけですけども。1人だけ連れて行ったこともありますし、3人連れて行ったこともありますけど。

担任をしている限り、「女の先生か」と言わせないためにも、育児については、父兄には言わない。と同時に、子どもはいつも側においておきたいという田中さんの母親としての思いが、「子連れ家庭訪問」になった。

ほとんどの家庭訪問の場合、母親が教師に対応することになる。男性教師と母親の場合、どちらかというと表面的な話になる場合が多いが、女性教師の場合、女性同士であるために、違った話の展開になり、長引くことが多かったと言う。

家庭訪問すれば、保護者会に来られるのは女の人ですけども、例えば、女の子ですと進学校ですから、「子どもがK高校に入ったら勉強などのストレスで生理が止まっちゃったんですけど」って、そういう相談を受けたり。それから男の子でも「朝パンツが汚れてるんですけど、先生ほっといていいんでしょうかね」って、そういう相談を受けたり、男の先生だったら絶対そんな話は出ないと思いますけど、家庭ではそういう話も出て、ついつい話が伸びちゃうんですね。だいたい20分ぐらいの予定で組んでいくと、1時間ぐらいになっちゃうもんですから。……離婚の相談を受けたこともありました。「今だんなさんとちょうどこういう事情で離婚しよ



うと思ってるんだけど、生活がどうのこうの」って。「離婚後、女が生活していくにはどうしたらいいか」とか、そんな相談を受けたりしたこともあったんだけど、そんなふうだから、そういう時はね、「やっぱり女子教員じゃないと、こういうつながりはできないな」って思いましたけども。……男の先生とお母さんの話だと、表面だけしか話せないと思うんですよね。だから、家庭訪問っていうと「本当にこれきれいな造花ですね、お母さん作られたんですか」って、「そうなんです、実はね」ってそこから話がわーっと広がるもんですからね。つついっ伸びちゃうんですよ。だから、半分母親で半分主婦の会話というかそんなふうで。

このように、子どもの育児、教育を担っているのは母親が多いので、同性であることから生じる母親と女性教師の関係性は、男性教師と母親とは大きく違ったものになっている。

### 受験進学高校の教師として：花と文学の運動を実践して

田中さんの前任高校は県下を代表する伝統進学高校であった。生徒の受験勉強の手助けとしての授業、補習授業などもやっていた。しかし、受験勉強から離れた何かを生徒に伝えたいと考え、専門である文学と農家育ちであることを使って、生徒に働きかけようとした。

1、2、3年と持ちあがることを休むまもなく担任やってきましたが、最後の3年間は副担任だったんですよ。で、暇だったもんですから、担任をやっているとどうしても受験校ですと、「少しでも勉強しなさい、いい大学に入りなさい」という指導になっちゃうもんですから、授業でも点数取るための……。私は自分が国語の教員ですから、多少とも、文学っていうほどのものじゃないですけど、国語の教員ですから。それから農家で育ちましたから、それをミックスさせてずっとこんなこと6年やってきたんですけど、K高校で。情操を育てたいという考えで、担任の頃から始めたんですけど、例えば、家の裏庭に咲いていたとか、学校の通り道堤防に咲いていた花だとか、花じゃなくても草の状態でも、1種類取ってきて、それにちなんだ歌や文章の1節をつけるんです。できるだけ文学作品から選びましたけども、ない時は自分で作りましたけれども、そうやって紹介するような形のことをずっとやってきたんですよ。そうするとね、例えば、何か花があって、名前はわかったんだけど、それにちなんだ物語、文学作品がないと、「これはこれこれという花です。文学作品に出てくる例は見つりませんが」って、そこまでしておくと、2・3日後に生徒の誰かがそこへ書き加えたりするんですよ。そういう楽しみがありまして、すごく。……(大学受験を)離れたことをしたかったっていうか。受験だけじゃなくって、なんかK高校に受験以外の何かを付けたいと思ったんですね。

男性教師が将来の出世を考え「業績」を上げるために、「学校の名誉」のために、あるいは、生徒の前での「能力証明」のために生徒を受験競争に駆り立てるのは対照的に、田中さんは「生徒に受験勉強以外のことを教えることに熱心であった」。その1つの実践として、「花と文学」運動で、自宅からあるいは近くの路上から草花を持ってきて学校の花壇に植え、その草花にまつわる歌、小説などについて触れる文章をせっせと紹介していた。さらに、部活の顧問として、JRCのクラブ活動の指導の一環として、現在でいうところのガーデニングをしたりもした。

## 現在の心境：教育者として、嫁・娘として

田中さんにとって教師というのは天職のようなものだ。「人の人生に関われる」楽しい職業である。K高校で1年から3年まで担任を持った卒業生が正月の2日に田中さんの自宅に集まる。先輩と後輩との関係はないので、朝10時頃から最初のグループが来て、最後のグループが帰るのは夜の12時頃だという。その会では、それぞれの近況を報告し合うだけでなく、近況を1枚のレポートとして書いて残しておくことになっている。そのレポートを読むのが田中さんにとって最高の喜びであるという。そして、そこに集まった同級生たちは、他地域でネットワークを作り、東京でもお互い会っているそうである。

私は自分で教師は本当に合っていると思うんです。「本当にこれはおもしろい仕事だなあ」って。私に合っている仕事というか、「やっぱり、なんかその子の人生に関わるのはおもしろいなあ」って思うんですよ。「その後どうなったかなあ」っていうことが知りたいもんですから、10年ぐらい前、やはりうちの子ども達が大きくなってからなんですけども、私の家を同窓会の会場みたいにしてるんですよ。正月、1月2日って決めてるんですけど、昨年から人数制限しましたけれども、毎年5、60人来るんです、卒業生。だいたい私が担任した子。特に持ちあがって行きましたんで、K高校の生徒がほとんどなんですけども、1、2、3年と持ちあがってきてまして、それですぐに下りて1、2、3と3周りしたんです。この3世代が来るんですけども。

田中さんにとって心の転機になるような大きな事件が8年前に起こった。8年前、夫が肺ガンだと分り、「生きていてくれさえすればよい」と思った。その頃から、家事、子育てをしない夫への不満がまったくなくなり、授業の内容なども変化したきたのではないかと振り返っている。

教育に携わるものとして、農家育ちの経験から、生徒に土を通して、生命、他人の心への「想像力」を育てていきたいと考え、土に親しむために花を植えることを実践している。そのような体験を通して、生徒たちに全体の中の自分、地球の中の自分の位置などについて考えてもらいたいと思っている。その意味で、すべての生徒に「農業体験」を義務づけるようなカリキュラムができればいいのではないかと考えている。

現在55歳の田中さんの子どもたちは成人し、育児は終わり、母としての役割は終わっている。しかし、最近は、嫁、娘としての役割がある。姑の面倒を看ながら、痴呆症の出ている実母の世話をすることが、田中さんの嫁、娘としての役割である。

実家の母が数年前からちょっとボケが始まりまして、昼間1人でいることが多いんですよ。それがすごく苦になったもんですから、2年前に。私、ここに来て2年目なんですけど、……定時制にかえてもらって、で昼間は私が母親の面倒を見ようと思っておったんです。それで1年前から、2年越しで、定時制に変わりたいといって頼んだから入れてもらえるかと思ったら、結局だめで、ここに来ました。……K高校にみえた校長は型どおりにやるけど、結構人間の状況も考えてやろうという方で、その方が、特に私が言ったわけじゃないんですけど、「ここが実家で一番近いところの高校だから」っていうことで、それでやってくださったのかなあって思うんですよ。……それをみなさん（母親の病状の事情を）知ってるもんですから、今は本当に1時間授業が空いていても、「ちょっと外出させてください」って、家に行って母親の状態を見

て来たりとか、そういうことができて。……車で行っちゃいますけど、1キロあるかなあっていうぐらいです。何しろそんな距離ですので。それで1時間以内なら、ちょくちょく様子をみて来れますし。最近ヘルパーさんに度々来てもらうようになりましたので、楽ですけど。まだそういうヘルパーさんをお願いするとかそういう頭がなかったもんですから、私が面倒見ようと、そういう意識ばかりだったですから、そんなふうにしてたんですけど、今はもうヘルパーさんに週2回、それにデイサービスも利用して。学校の帰日には必ず毎日寄ってますけども。……実は独身の兄と暮らしてたわけですよ。その兄が急死してしましまして、それもヘルパーさんがある程度来てもらうようになってから、本人も予測しない突然の死だったんですけども。それで次兄がわりあい近いところに奥さんと子どもと住んでいましたから、その次兄の奥さんという人が、パートみたいなのに出てたんですけども、「私が仕事を辞めて看ます」と言ってくれましたので、今は昼間は仕事に来るような感じで、ヘルパーさんの来ない時は、次兄の奥さんが面倒見てくれております。

2年前から、進学高校では普通レベルのT高校に赴任してきた。実家の母親に「ボケ」症状が出て、近くで面倒を看たいと思い、定時制高校への異動を希望した。しかし、希望の定時制高校に異動できず、母親が近くに住んでいる地元の全日制高校への異動であった。将来的には「私が面倒をみる」と考えていたが、同居していた独身の実兄が突然なくなった。その後は、近くに住む次兄夫婦が母親の面倒を看ていた。特に、次兄の嫁がほとんど面倒をみていた。現在は、昼間は、ヘルパーさんを頼み、田中さんは時々、勤務時間中の外出という形で母親の様子を見ている。現在は、自分の家族のことよりも、母親の家の方に行っていることが多いという。

親の介護の問題は女性教師も例外ではない。嫁、娘に負担がかかってくる。田中さんも娘として痴呆の母親の生活を考えずに、仕事を続けることはできない。若い頃は育児、ある程度の年齢になると老人介護という二重の負担が女性教師である田中さんの肩にかかった。職場の論理からすると、フルに働けない先生として批判を受ける場合もある。それは特に、男性教師からの批判である。さて、それが正当な批判なのか。その批判に対しての負い目、それにどのように対処するかが、女性教師にとって、教師生活のジェンダー問題である。

### むすびにかえて：ジェンダー問題を中心に

まとめとして、もう一度田中さんのライフヒストリーを時系列的に描写しながら、ジェンダーに関わる問題を中心に論じる。

まず、教師になるまでの時期に、なぜ経済的自立をめざし教職に就くようになったのであろうか。人生における重要な事件、「父親の死」により、田中さんは小学校5年から母子家庭の長女として生きるよう運命づけられた。中学生時代の成績の良さにもかかわらず、その貧しさゆえに上級学校への進学は不可能なように思われた。しかし、戦後民主主義の「平等主義」の産物ともいえる「優秀で貧しい」生徒・学生への育英会奨学金の制度化という歴史的偶然で、田中さんは高校進学チャンスを与えられた。進学した高校は、男子生徒が8割以上いる伝統進学高校であったが、その大学進学志向の学校文化の中では、性別にかかわらず、「大学へいくのがあたり前のこと」であった。そのような学校文化で3年間

を過した田中さんにとって、祖母からの「大学へ行ったら、お嫁にいけないよ。」という言葉は無意味なものであった。奨学金があたえられ入学した国立大学の学部は文学部国文科を選んだところに、ジェンダー・バイアスはあきらかにある。しかし、大学生活において、男性中心のワンダー・フォーゲルに参加したり、学生運動に関わるなど、と男女平等の状況を経験した。そして、就職する段階になり、「女性の教科」を利用して、「経済的自立をめざして」女性に平等に開かれていた教職に就いた。

教職に就いた後の独身時代、教師間では男女平等はごく自然なものとして受け入れられていた。生徒からのまなざしは時に「女性軽視」であったが、ごく日常的なエピソード的なものにすぎなかった。

田中さんにとって、本格的にジェンダーを意識せざるえを得なくなったのは、結婚してからのことであった。結婚して大家族の嫁になることに伴う役割は、すべてがジェンダーによって規定されていた。学校現場において、出産し産休を取ることは教師の権利として認められていたにもかかわらず、3人目の子どもを産んだ時には、教師を辞めるようにとの校長の忠告があった。また、育児休暇は制度化されたにもかかわらず、田中さんは取らなかった。それは、「十分働けないこと」への負い目であった。まだ問題はあがあるが、1995年の育児休業制度取得率は98.0%になっている（河上 1999年92頁）今の女性教師の職場は、1975年に制度が確立された時に育児休暇をとらなかった田中さんの状況と比較したら、女性の権利が確立された状況であり、ジェンダー問題についての25年間の歴史的変化をそこに読み取ることができるであろう。

しかしながら、家事・育児は女性の役割という状況はこの25年間変化はほとんどなかった。勤務校での唯一の女性担任になった田中さんであったが、女性教師であることを意識し、男性教師の120%の力を発揮するように務め、父母に対しては母親であることを意識させないように努力した。そして、常に、職場と家庭のバランスを考えながら、学校の仕事を能率よくこなし、計画をたて時間で区切って行動した。また、家庭内において、家事・育児をしない夫を「しょうがない」と受け入れ、姑からの協力は得られるものの、嫁としての家事を怠ることは許されないことであった。

教師としての田中さんは授業本位であり、教材研究を十分やることを心掛けていた。授業を通して、生徒の人生にかかわることが楽しいことである。だから、大学進学志向の進学高校の授業においても、受験のための勉強を超えた何かを伝えるために文学教育を実践しようとしてきている。受験のための教育という点において、男性教師と違った態度であった。それは、「出世コース」を望むよりは、仕事と家庭を両立したいと考える女性教師の志向である。

男性教師にとって、出世コースに乗るかどうかは人生における重要な決断である。そのコースに乗るか、無視するかである。乗る場合には教育会に入り、体制的な方針を実行し、管理職をめざす。あるいは、組合に入り管理職に対して批判的態度を取り、そのコースを無視する。その意味において、男性教師にとって、組合活動を続けるかどうかは、「出世コース」を拒否するかどうかの試金石であった。

同じように「組合の時代」を生きた女性教師としての田中さんは、組合の婦人部長などを務め、組合活動には一見、熱心であった。田中さんは「弱い者」が何らかの主張をしようとするためには組織が必要であり、女性の地位改善にも組合は必要であることには何ら

疑問を持たなかった。そして、婦人部長として、県教育委員会との交渉で、自分の分担の発言をしたり、署名活動などにも参加したりしている。しかし、その組合への関わりは男性教師のものとは異なり、組合活動への関わりは「社会的弱者」の権利獲得を支援するためのものであり、「出世コース」への道の拒否とは異質なものである。

50歳代半ばの現在の田中さんは、卒業した教え子たちと今教えている生徒の人生に関わることに喜びを見出しながら、生徒の中に「想像力」を育みたいと考えている。しかし、田中さんたち女性教師の多くは、管理職にならなかった同世代の男性教師のように校務の減少、担任の免除等により、悠々自適の生活を送れるわけではない。女性としての最後の役割、老人介護を担っている。実母の痴呆の発症により、田中さんは勤務高校の異動の申請をして、実母の近くの高校に勤務し、兄嫁とともに実母の介護を自分のやるべきこととして、生活の中心に置いている。

このように田中さんのライフヒストリーの描写、分析から、歴史的時間の制約を受けながら、ジェンダーを意識して教職を継続してきた女性教師の姿が浮かびあがる。田中さんの世代は、このような自分たちの経歴について、「働かせてもらえるだけでもありがたい」と思い女性としての役割を果たしながら、教職を続けることに、教師として、母としての喜びを見出している。戦後民主教育の第一期生として、パイオニア的であったがゆえに、女性として働くことから生じる葛藤を経験せざるを得なかった。現在の若い女性教師たちが当然として獲得している権利は、田中さん世代が組合活動などに関わりながら獲得したものであった。

さてここで、『30年目の同窓会』に出てくる高校教師の「礼子」(木村 1994年44-56頁)と田中さんとを比較してみる。「礼子」の場合も小学校5年の時に父を亡く<sup>4)</sup>している。そして、母親の一言「人に食べさせて貰う人生か食べる力をつけて自力で生きる人生か、どちらか1つを選べ」に対して、大学へいくことと経済的自立がストレートにつながった。いつ帰るかわからない夫は、家事の当てにはならなかったが、同居して子どもたちの面倒をみってくれる母に、優しいのがなにより嬉しかったと「礼子」は言う。田中さんも家事・育児では夫を頼れず、優しい母親の代わりに、働きものの協力的な姑がいた。その点では、嫁・姑問題がある田中さんはより厳しい環境であった。そして、教師としての「礼子」は「『授業が原点』と自分の位置をはっきりさせつつも、納得のいくまで準備をしても受験の壁に阻まれて納得のいく授業ができない無力感に直面し、反す刀で民主主義社会の一員としてなすべきことをしていないのではないかと、思い出したように自分を責める迷いの心境」を持っていた。田中さんも授業のための教材研究ができなかった時に、教師として「罪の意識」を持つといい、受験準備の授業だけでない何かを心掛けている点でも共通している。しかし、田中さんは、「礼子」とは異なり、「反す刀で民主主義社会の一員としてなすべきこと」をしようという「べき」で生きようとせず、「働いていないにもかかわらず、権利だけを要求する」組合の「理想主義的」イデオロギーにも共感せず、「真面目に働くこと」が当然と考える人である。そして、それは、ジェンダーの視点からみると、歴史的時間に影響された田中さんの権利意識の限界でもあるが、それはまた、農家に生まれ、小さい時から農作業をして「まじめに働くこと」が前提としてあった田中さんの「たくましい生活感覚」からくるのであろう。

最後に、このような事例的ライフヒストリーはジェンダー問題を考えることにどれだけ

有効であろうか。まず第1に、ラディカルなフェミニスト的解釈ですべてを分析するのではなく、女性の体験の語りから、ジェンダーが具体的にどのような形で、女性の意識や行為を規定しているかという歴史的でかつ社会関係的メカニズムを解明するのに有効ではないであろうか。第2に、女性の地位向上に関わる法的、制度的改善が1人の女性の生活に具体的に関わっているのかという事例的検証にもなり得るであろう。第3に、インタビューに基づくので必ずしも客観的事実の再構築であるとは言えないが、具体的な1人の教師へのジェンダーによる影響についての「真実」が明らかになり、教職と家庭との間で葛藤する問題がより明確に表現されるであろう。

## 注

- 1) 塚田 守『受験体制と教師のライフコース』は、インタビュー調査に基づき、19名の男性教師のライフヒストリーを考察し、教師の仮説的類型を構築しようと試みた。類型の分類軸として、1) 組合活動志向か管理職志向かと2) 生徒教育志向か自己学習志向かの2つが重要なものと考えられたが、この2つの分類軸は女性教師にも有効であるかどうかを比較検討しようしている。
- 2) このライフヒストリー研究は、文部省科学研究費基盤研究C「高校教師におけるジェンダーと世代差の社会学的研究」の一部をまとめたものであり、すでにインタビューが終了している女性教師たちとの共有する点が多い。また、「戦後の平等教育の一期生」という表現は木村栄『30年目の同窓会』によるものであり、お茶の水大学の卒業生の中の教師になった女性たちとも通ずるところがあった。
- 3) 田中さんは小学校5年生の時に父親を亡くしたが、その2年前に夫も父親を亡くしていた。そして、二人ともほとんどの休暇、休日などを農家の仕事をしながら、高校、大学に通った経験を共有し、母子家庭の農家で育った同じ境遇を経験した。
- 4) 父親の死は家族の経済状況を悪化させるだけでなく、女性を自立に向かわせる転機にもなる。山崎（1994年）が描写し分析したK教師のライフコースにもあてはまることである。

## 参考文献

- 河上婦志子（1999年）「女性教員たちは平等になったか？」『女性学研究』83-96頁  
 木村 栄（1994年）『30年目の同窓会 民主教育一期生の「女の時代」』筑摩書房 全268頁  
 塚田 守（1998年）『受験体制と教師のライフコース』多賀出版 全386頁  
 堀内かおる（1999年）『家庭科教師としての自己形成過程に関する研究』報告書 横浜国立大学教育学部人間科学部 全61頁  
 山崎準二（1995年）「教師のライフコース研究——モノグラフ：女性教師の場合」『静岡大学教育学部研究報告』（人文・社会科学篇）第45号、143-160頁